なきごえ

1977

5

大　阪　市
天王寺動物園協会

動物と私

岡　田　康　稔

巣から落ちたモズのひな

私が生まれ、そして少年期をすごした家には、北風を防ぐため、高さ6～7mのアラカシが20mほどにわたって、枝葉を繁らせていました。その繁みのどこかで、毎年必ず1組のモズが巣をつくりました。

あれは私が、小学校6年生になりたての春のことでした。巣立ちには少々早いひなが、2つも地面に落ちていて、親鳥を求めて悲しく鳴いていました。

私は、親鳥がきっと迎えにくると考え、かくれてしばらくようすを見守ることにしたのです。

一方、巣に残るひなへは、モズの両親が交替で忙しく餌をはこぶのに、そのすぐ下で鳴き叫ぶ2つのひなには、なぜか全然関心を示さないのです。それは、もう親と子の関係ではなく、単なる物体としての対象であるかのような態度でした。

このままではひなが死ぬ。私は急いで手頃な木箱を探し、片面に四角い餅焼き網を張って、2羽のヒナを収容しました。でも、それだけでは親に見捨てられそうで心配ですので、巣に残った2羽のひなも箱へ移し、巣の近くの枝に吊りさげてみたのです。

親鳥たちはしばらくためらっていた後、餌運びを再開しました。もちろん4羽を差別せず給餌しています。親子関係が復活したのです。

では、先ほど地上のひなが、親を呼んで鳴き叫んでいたとき、全くこれを無視した親鳥の心理は、どう解釈したらよいのでしょうか？わかりません。

悲しいヒナの死

それからは毎日、登校前と下校後、日暮れまで数回、そっと親子の動静観察をつづけました。

5日目の夕方、両親の涙ぐましい努力にもかかわらず、半数の2羽のひながまず仆れました。その日の朝、羽をばたばたさせ、巣立ちの練習をしているようすでしたのに……。

目印をつけなかったので、あのとき巣から落ちていた2羽だったのかどうか、わからずじまいになりましたが。

急に給餌量がふえたためか、残った2羽は至って健全にすごし、このまま万事親まかせにできそうだ、と安心したのでした。が、この考えは結局甘すぎたようです。

5月20日の朝、ひなの1羽が横たわっていたのです。前月24日に木箱へ移してから、26日目でした。そして、翌日の夕方には、最後の1羽も息をひきとりました。遺体はどちらも全く空腹状態です。餓死したとしか考えられませんでした。

そういえば思い当るふしがあります。それまで交替で給餌にきていた雄親が、19日から木箱のそばへ来なくなりました。そして、最後のひなが死んだ日の朝、雌親の給餌を見たあと、ついに両親とも給餌を打切ってしまったようでした。その衝動は突然おそってくるもののようで、私には予測できなかったのでした。

俗説は本当か

ひなを入れる木箱に、餅焼き網を釘づけしていた私に、母がこんな話をしてくれました。

「鳥のひなを篭に入れて、親鳥に育てさせていると、はじめは何とかして篭から逃がしてやろうと、機会をうかがいながら餌をはこぶけれど、絶望とさとったら、毒のまじった食べ物をやり、必ず子殺しをするのや。それが親の慈悲心というもんや。きっと、このひなもそうなるやろ……。」

養育停止も養育本能から

あの年の12月、元号は大正から昭和に変り、そして今年は52年。“三つ児の魂”は今も鳥の生態研究に打ちこんでいます。その後わかってきたことは、最初、親鳥が熱心に哺育したのは、彼と彼女に親として宿命づけられた任務であり、養育本能に従ったまでのこと。また、ひなが独立生活に入るまでで、哺育をぷっつり断ちきるのも、本能なのです。これが自然界の厳粛な“おきて”というものなのでしょう……。

（大阪府鳥獣保護員）

なきごえ5月号

動物と私 …… 2
“フタコブラクダの赤ちゃん” …… 3
動物園グラフ …… 4・5
大阪の野鳥 …… 6・7
モズの はやにえ について …… 8・9・10
動物園ニュース …… 11

表紙の写真説明

“チンパンジー”

今年の3月8日に入園したチンパンジーで、2才位のまだほんの子供です。左がメスのカンナちゃん、右がオスのダイスケ君です。

（撮影：宮下　実）

“フタコブラクダの赤ちゃん”

3月30日夕方、フタコブラクダの赤ちゃん（メス）が誕生しました。母親はこれが2度目のオメデタです。弱々しかった足腰も、日ごとにしっかりしてきています。（愛称＝ミル）

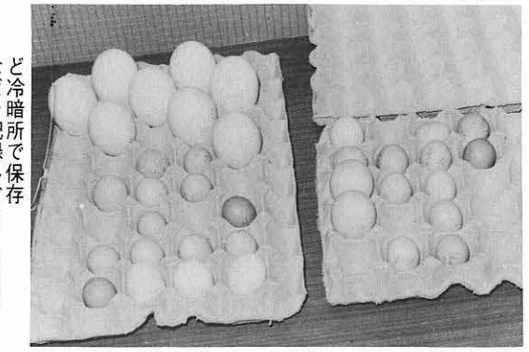
（撮影：宮下　実）

動物園グラフ

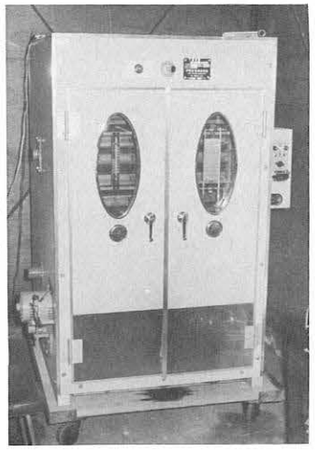
“キジの卵のふ化”

3月末から始まったキジ類の産卵は、4月に入って産卵のピークを迎えました。今回はこのキジの卵のふ化までの過程を特集してみました。

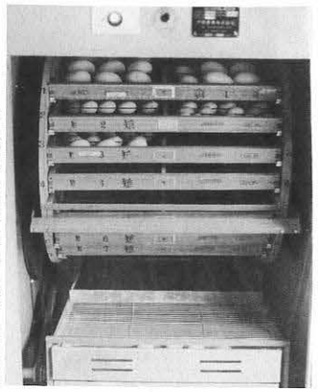
（撮影：宮下　実）



① 産卵した卵は重さ、大きさなどを記録し、5～7日ほど冷暗所で保存

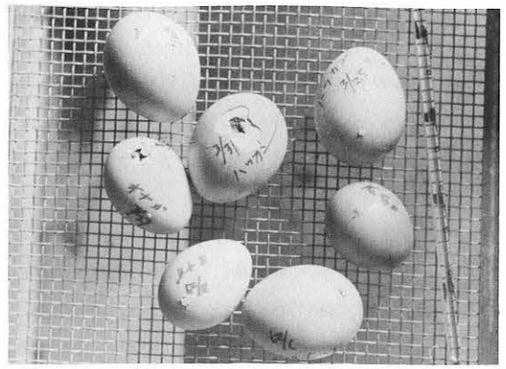


② ふ卵器は温度37.5～38℃、湿度60～70％と一定に保ている

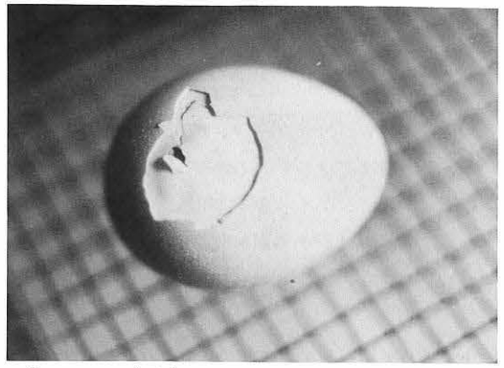


③ ふ卵器の内部上段は卵を置く卵座下段はふ化直前に移す発生座

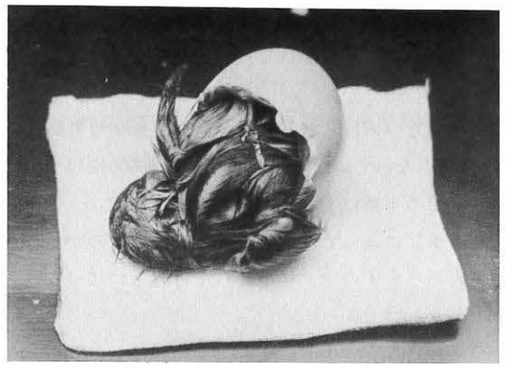
④ 検卵に検卵し、無精、中止卵は除去ふ化器に入れて、5～7日後



⑤ はしあげ
大体、23～24日で卵の一部に小さなわれ目が入る。このはしあげ又ははしうちが見られたら下段の発生座に移す



⑥ はしあげが進むにつれて、卵のわれは大きくなり、ヒナの口バシがのぞき、鳴声も聞える



⑦ 体半分が出たところ

⑧ ふ化してしばらくするとよちよち歩き出し、翌日には育雛器に移し、餌付を開始する

3・4月の動物園日記

3／6．ベイサオリックスのオスが角の先を負傷しましたので治療してやりました。

7．ヤギがまた1頭出産しました。

8．2月3日に生れたトカラヤギの仔が下痢をしているので治療をはじめました。
2月22日からの日本庭園池のしゅんせつ作業が終了し注水を開始しました。

10．ケープペンギン1羽がふ化しました。ふ化日数は42日です。尚、このペンギンの繁殖は日本では2度目です。

13．アカカンガルーのメスの袋が動き始め、赤ちゃんが入っているようです。
ダチョウのオスが発情しています。

14．チンパンジーのサクラがカゼ気味なので薬を飲ませました。
ギリシャガメが右後足を腫らせているので治療をはじめました。

15．日本庭園池に水が充分たまったので他所へ移していたコイやコブハクチョウ、カルガモを戻しました。きれいになった池に入れられたカモはみな元気一杯です。

16．イワトビペンギンのオスが下クチバシを傷つけてしまったので治療してやりました。

19．カゼ気味だったチンパンジーのサクラがすっかり元気になりました。

22．メンヨウのメスが脱毛しているので治療中です。

23．バーバリーシープの仔が2頭生れました。

24．キジ類が産卵を始め、ふ化器に卵を入れました。

25．ジャコウネコのメスが肺炎のため死亡しました。

27．ミナミアメリカオットセイが交尾をしました。

30．ニホンシカの昨年生れのメス3頭を秋田市の大森山動物園にプレゼントしました。
フタコブラクダがメスの仔を産みました。

4／1．シマウマが回虫をわかしていたので駆虫してやりました。

3．アオカケイのメスが盲腸虫症のため死亡しました。

6．クロサイのオスがメスと交換で入園しました。

動

①
ど冷暗所で保存
などを記録し、5～7日ほ
産卵した卵は重さ、大きさ

3・4
3／6.
ましたの
7.
8.

10.

大阪の野鳥

岡　田　康　稔

5月10日からの「愛鳥週間」が、ことしもめぐってきました。そこで、私たちの身近な大阪府下に、どんな野鳥がいるのか、しらべてみることにしましょう。

戦後しらべあげられた、大阪府に生息する野鳥は270種類となっています。日本全体で約500種類ですから、その半数以上がいることになります。

鳥は季節によって、住むところを変えるのが、たくさんありますので、年中これだけ府下にじっと住んでいるわけではありません。5月ごろですと、170種類内外になります。

では、どんな場所に、どういう野鳥が住んでいるのか、お話ししましょう。

《山林の鳥》

ヒヨドリ・シジュウカラ・カケス・キジバトなどが年中いるほか、私たちになじみ深いウグイス・メジロ・ホオジロ・キジ・ハシブトガラスなども住みついています。

初夏には、南の国からサンコウチョウ・オオルリ・キビタキ・クロツグミなど、声も姿もきれいな歌い手たちや、カッコウ・ホトトギス・ツツドリ・ヨタカ・アオバズクなどの夏鳥が帰ってきて、森の歌声は一段とにぎわいます。

アオバズク
青葉のころ南の国から渡ってきて、山あいの神社や山寺の森で夕方から、ホー、ホーと2た声づつ区切って鳴く

秋になると、夏鳥と入れかわりに、ツグミ・シロハラ・シメ・イカル・アオジ・ミヤマホオジロなどが、北の国からやってきて、冬を越します。

▶金　剛　山◀

大阪府下で一番高い山。頂上附近にはブナ林が残り、数多くの野鳥が住みついているので、鳥獣保護区に指定されています。

クロツグミ・ミソサザイ・カッコウ・オオアカゲラの府下唯一の繁殖地です。初夏にはこのほかツツドリ・ヨタカ・トラツグミなど30種類ほどのなき声が聞けます。

▶み　の　お◀

みのお公園から勝尾寺にいたる渓流沿いではカワガラス・キセキレイ・オオルリが、また尾根筋でサンコウチョウが、長い尾羽をひらひらさせて飛ぶのに出会ったり、ウグイス・サンショウクイの声も聞けます。

冬にはミヤマホオジロ・アオバト・ベニマシコなどもよく見かけます。

また、運がよければ府下でもっとも大形のクマタカが、つばさをひろげて空を舞う雄大な姿に見とれることもできます。

▶岩　湧　山◀

以前は80種もの野鳥が住み、探鳥の好適地でしたが、今は50種ほどに減りました。ヒガラ・オオルリ・アオゲラ・コジュケイ・キジがおり、ときにはサシバ・ツミなどのワシタカ類も見られます。

夜はアオバズク・ホトトギス・トラツグミも鳴きます。

《平地・水辺の鳥》

市街地はスズメが主ですが、春秋の渡りの時期にはヒヨドリ・ツグミ・ムクドリなどのほかキジバトやウグイスなど、思わぬ鳥が庭の植木を移ってくるのが見られ驚かされます。

水田ではヒバリやスズメ、夏にはツバメ、冬にはムクドリ・タヒバリ・カシラダカ・ハクセキレイなどがやってきます。

ため池にはカイツブリやバンが泳いでおり、大阪城や大きな御陵の堀でカモ類が冬を越します。

河川の草原ではオオヨシキリ・セッカが巣をつくり、冬にはオオジュリンも見られます。

▶淀川河川敷◀

新御堂筋の橋から十三大橋の間の淀川へは、ヒドリガモ・コガモ・オナガガモなど1000羽以上が渡ってきて冬を越します。両岸に点在するヨシ原はオオヨシキリ・セッカ・バン・ヨシゴイ・カルガモの巣づくりに、恰好の場所になっています。

冬の河川敷ではカワラヒワ・カシラダカ・ツグミなどが砂あびや、水あびを楽しんでいます。時には飼い鳥の野生化したベニスズメに出会ったりして、びっくりすることもあります。

▶御陵の堀◀

仁徳・応神・反正・継体などの天皇陵の堀は、立入禁止のため、鳥たちにとって安住の地になります。

夏の御陵の森では、10年ほど前まで白サギ類・カワウなどが集団で巣をつくり、ヒナを育てていたのですが、今はなくなりました。

冬はマガモ・コガモ・ヒドリガモ・オシドリなどカモ類の集団越冬地になります。

▶東大阪市池島町◀

休耕田の湿地へ、春秋の渡りの途中タカブシギ・キアシシギ・トウネンなどのシギ類が、しばらくの間羽を休めに立寄ります。

水辺で憩う夏姿のコサギ
一部は南国へ渡らず真冬の水辺でもみられる

水鳥のバン・コサギ・チュウサギなどが夏に見られます。以前クロトキの珍客訪問でさわがれたこともありました。

《海岸の鳥》

大阪市から泉南郡岬町までの長い海岸線も、多くは埋めたてられて、臨海工業地帯になってしまい、野鳥の好む自然環境はほとんど残っていません。それでも多少の水鳥が海上を飛んだり、海岸べりにたたずむのが見られます。

何分大阪湾は内湾ですので、外洋性の海鳥は見られませんが、海上ではウミネコ・ユリカモメ・カモメなどのほか、海ガモ類のスズガモ・キンクロハジロ・クロカモや、アビ類が、えさを求めて飛びかったり、海にもぐったりしているのが見られます。

海岸べりではシロチドリ・コチドリなどの千鳥や、ハクセキレイなどの姿を散見します。

▶南港埋立地◀

大阪市の西南端、大和川と木津川の河口の西に造成された南港埋立地は、造成がはじまった頭初から、多くの野鳥が渡来する所で、大阪府下の鳥の8割ちかくがここで記録されています。

特にシギとチドリの仲間に非常にめずらしい種類が含まれています。

トウネン・ハマシギ・オオソリハシシギ・キアシシギなどのシギ類、ダイゼン・ムナグロ・オオメダイチドリなどのチドリ類が、合わせて37種類も、春秋の渡り時期にやってくるので、全国的によく知れわたっています。

オオソリハシシギの群
春秋の渡り時期には大阪南港埋立地の干潟へたくさんのシギ・チドリ類がやってくる

そのほかカモメ類ではコアジサシ・アジサシ・ウミネコ・ユリカモメ等が、時に大群でくることもあって、ここがいつまで野鳥の楽園として残るか、心配されています。

大阪市当局は、この造成地が完成する頃、西北端の一角に野鳥公園をつくり、何とか野鳥の生活環境を残そうと、工事計画の中に盛りこんであるということです。

▶男里川河口◀

泉南市で海にそそぐこの河口の干潟にも、少数ですがチュウシャクシギ・キアシシギ・メダイチドリ・トウネンなどのシギ・チドリ類が渡来します。

（大阪府自然保護課・鳥獣専門員）

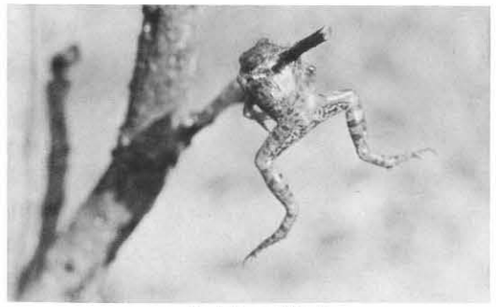
モズのはやにえについて

小　林　桂　助

モズの仲間は日本からは5種が知られています。われわれの目にごく普通にふれるものは留鳥であるモズでありますが、このほかに夏鳥として南方から渡来するものにアカモズとチゴモズとがあり、また北海道にはオオモズが冬鳥としてサハリン方面から渡来して来ます。このほかにオオカラモズというオオモズよりも一廻り大型の鳥が冬季ごくまれに朝鮮半島方面から迷行して来ます。

モ　ズ

さて、モズは日本ではどこにでも普通に見られる鳥でありますが、北方のものや高山のものは秋から冬にかけ、積雪の少ない本州中部以南の平地に移動してくるものが多いようであります。秋も深まる頃、人里近くにあらわれて、木の頂にとまって、キーッ、キーッ、キーッと鋭い声でなくモズはよく目立ち、典型的の秋の風物として俳句でも季は秋となっています。



トノサマガエル

この頃村里を歩きまわると、カエル、バッタ、小魚などがとげのある木に刺されているのを見かけますが、これは皆モズの仕わざであって、モズの“はやにえ”といわれています。このことは昔から知られていて、万葉集にも“くさぐき”または“はやにえ”という言葉で読まれている歌がありますし、英語でもモズの別名を　Bucherbird　といい、また独乙語でも　Neuntőter　（9人殺しの意）というのもこの習性から来ているものであります。

オンブバッタ

私は1972年から1976年の4年間、主として丹波地方でこの　はやにえ　を調べて歩きまわり、これまでに2,255例を記録致しましたので、以下にその結果をのべ、モズが はやにえ を作る動機やその意義などに付いて考えて見ましょう。

まず、この2,255例の はやにえ の見られた時期を月別にすると次の様になりました。

9月下旬	1 例	12月下旬	480 例
10月上旬	14 例	1月上旬	266 例
10月下旬	13 例	1月下旬	64 例
11月上旬	139 例	2月上旬	40 例
11月下旬	588 例	2月下旬	13 例
12月上旬	627 例	3月上旬	1 例
		3月下旬	2 例

このようにモズが はやにえ を作るのは、村里付近に渡来する10月頃からであって、11月、12月、1月上旬にもっとも沢山見られますが、2月になると急激に減って来て、3月にはきわめてまれにしか見られないようになります。

次にモズはどのような所に はやにえ を作るかということですが、これは環境によって異なります。その多くはとげのある木や先のとがった枝でありますが、このような木の少ない所では有刺鉄線のとげにさしたり、また丈の高い枯草のまたの間にはさみ込むことも決してまれではありません。

丹波地方でもっともよく利用される木は、あぜ道や家の庭先にあるウメでありまして、発見した　はやにえ　の30%を占めていました。次いでサンショのとげ、カキ、畑の中の竹杭などでありました。一方播州平野には溜池がたくさん点在していますが、池の土手のススキ、ヨモギ、オオアレチノギクなどの枯草を利用したものが多く、全体の30%ぐらいを占めていました。この地方は丹波地方のような山間の盆地とちがい木が少なく、池のほとりのところどころにネコヤナギがあるだけですが、これを利用したものが26%ぐらいありました。

次に はやにえ は地上どのぐらいの高さの所に作られることが多いかも調べて見ました。2,255例の平均の地上からの高さは大体120㎝でありましたが、そのうち約80%にあたる1,795例は地上60㎝から200㎝の間でありました。最も高いものとしては500㎝の例があり、最も低いものとしては20㎝でありました。

次にモズはどのような種類の動物を はやにえ とするかを調べて見ましたが、これを動物分類学の綱別に見ると以下の通りとなりました。

綱	観察例数	種類数
1．昆　虫　綱	1,317	84
1．両　生　綱	584	8
3．硬 骨 魚 綱	129	7
4．貧　毛　綱	99	1
5．ヒ　ル　綱	35	1
6．爬　虫　綱	33	5
7．唇　脚　綱	26	1
8．甲　殻　綱	16	1
9．ク　モ　綱	7	4
10．哺　乳　綱	4	1
11．鳥　　綱	2	2
合　　計	2,255例	115種

（観察数の多い順）

以上の通り最も多いのが昆虫綱であり、全体の58%にあたります。次いで多いのが両生綱の26%でありますが、冬眠に入る時期の比較的おそいアマガエルと アカガエルの例が最も多いようでありました。またウシガエルはオタマジャクシのまま冬を越しますが、池や川に近い所ではウシガエルの幼生（オタマジャクシ）が はやにえ となっていることもまれではありません。硬骨魚綱ではギンブナ、ホンモロコ、ドンコなどがしばしば見られました。爬虫綱で最も多いのはカナヘビであります。ヘビの仲間ではアオダイショウ、ヤマカガシ、ジグモの3種が記録されましたが、最も大きいものでは35㎝もありました。然しまだトカゲの はやにえ には出合って居りませんが、トカゲは冬眠に入る時期がカナヘビよりも早いのか、また敏捷であるためモズが捕えにくいのか判りません。哺乳綱の4例はいずれもハツカネズミでありました。モグラやヒミズモグラを はやにえ にすることがあるといわれていますが、私はまだ見たことがありません。鳥綱の2例はスズメとキンパラでした。両方とも頭頸部だけが鉄条網のとげにさされており、体はすべて食べられたものでした。そのほかにモズがホオジロをくわえて運ぶ所を観察したことがありますが、私が見ているのに気付いて落して行ってしまいました。

アオダイショウ

このようにモズはいろいろな動物を餌にしますが、そのうち観察例の最も多かった昆虫について、そのうちわけを見ると次の表の通りであります。

昆虫綱の内わけ

順位	目　　名	観察例	種類数
1	直　翅　目(バッタの仲間)	817	25
2	鱗　翅　目(蝶、蛾の仲間と幼虫	358	19
3	鞘　翅　目(甲虫とその幼虫)	48	10
4	半　翅　目(カメムシの仲間)	33	9
5	カマキリ目(カマキリの仲間)	22	4
6	ハ　チ　目(ハチの仲間)	15	6
7	ナナフシ目(ナナフシムシの仲間)	13	1
8	トンボ目(トンボやその幼虫)	6	5
9	双　翅　目(アブやハエの仲間)	4	4
10	ゴキブリ目(ゴキブリの仲間)	1	1
	合　　計	1,317例	84種

このようにモズはいろいろな種類の昆虫を　はやにえ　としますが、この表にも見られる通り最も多いのは直翅目の817例でありまして、昆虫全体の約62%にあたります。種類も多くコオロギの仲間、イナゴ、トノサマバッタ、オンブバッタ、シヨウリョウバッタなど25種も見ることが出来ましたが、その中で最も多いのはエンマコオロギとコバネイナゴと

でありました。特にたんぼに農薬をまくことをやめてからはイナゴが目立って多くなって来ました。2番目に多いのが蝶や蛾の仲間で、358例と昆虫全体の27%にあたります。然しその多くは幼虫でありまして、特にヒトリガの幼虫がとげに刺されたり、枯草のまたの間にはさみ込まれているのをよく見かけます。カメムシの仲間は皆様も御承知の通り、一寸手にふれただけでも、不愉快なくさいにおいがします。しかしこのにおいをモズは感じないものか、またそれ程気にしないものか、 はやにえ になっているものがよく見られ、そのそばを通っただけでもカメムシ特有の香がただよっています。ナナフシの仲間にトゲナナフシという種類があります。秋になると出てくる虫ですが、割合に珍らしい種類で昆虫を採集する人でも、そう簡単には見ることが出来ません。モズはそれを上手に探して はやにえ としますが、よほど目がよいものとみえます。

さて、それではモズが はやにえ を作るのはどうしてでしょうか。その動機や はやにえ の意義についてはいろいろのことが考えられます。

はやにえ の最も沢山見られるのは前にものべた通り11月から1月までの秋おそくから冬にかけてであります。冬の間はモズのえさとなるような小形の動物や昆虫が少なくなるので、えさを見付けると、これを捕えてえさの不足を時の非常食として備貯するために はやにえ として残すことが考えられます。モズは寒気の来襲を予知するのか、雨や雪の降る前には特に はやにえ を沢山作りますが、その後寒さのきびしい日には はやにえ が急に減るのは、その間に食べてしまったものでしょう。

春になってえさとなる昆虫やカエルが沢山出てくる頃には はやにえ はごくまれになって来ます。また熱帯や亜熱帯のように冬の間でもえさの豊富な所にいるモズの仲間は はやにえ を作ることがほとんどないといわれています。このことはモズが寒さに備えて はやにえ を作るのであるという有力な根拠ということが出来ます。

またモズは小形のタカに似ているといわれるほどくちばしが鋭いのですが、脚の力はそれほど強くありません。そのために捕えたえさを脚で押えつけることがむずかしいので、一たん木の枝に刺してから、少しずつ引きちぎって食べるのだともいわれています。大形のえさ、例えばネズミ、小鳥、ヘビ、カエルなどを捕えた時には、このようにして食べるのは

ハツカネズミ

たしかに都合がよいでしょう。事実35cmもあるアオダイショウを木の枝に刺し、まず腹部の内臓から食べ初め、3週間位の後には骨だけ残してほとんど食べ尽した例を見たことがあります。

モズは巣を作るのに枯草や小枝を使用することが多いのですが、近年は畑の周囲などに張り巡らされているバロンテープを巣材として使用するものが沢山あります。バロンテープは長くてかなり強靭であるので、モズが巣材として取扱うのには大きすぎます。そこでモズは拾って来たバロンテープを木の枝や有刺鉄線のとげに引っかけてから少しずつちぎって巣材として運ぶことがあります。枝やとげに刺すのはえさだけでなく、巣作りの場合にもこのように木の枝やとげを利用しています。

しかし、一方ヒトリガの幼虫やハネナガヒシバッタのようにモズにとっては一口で食べられそうな小さな昆虫でも はやにえ となっていることがあります。このような例を見ると必ずしもひきちぎって食べるのに都合がよいから はやにえ を作るものであるというだけの説明では足りません。

次に考えられることは、モズは満腹時であっても目についたえさは一応捕えて はやにえ として残すのではないかということです。

若し、これが動機であるとすると、冬の間に はやにえ が多く、えさの多い夏にはあまり見られないということについての説明に不充分であります。

以上それぞれの考え方には根拠がありますが、その動機をその中の一つにしぼって意義ずけすることは出来ないと思います。この習性をモズの本能といってしまえば簡単なのですが、祖先から受けついだこの習性はその祖先が、古い有史時代の寒冷期に、えさの不足に備えて、繰りかえして来た習性がうけつがれて来たものと考えられるかと思います。そして一たん本能として固定してしまえば、えさの大小にかかわらず、この行動がとられるものではないでしょうか。

（日本鳥学会評議員）

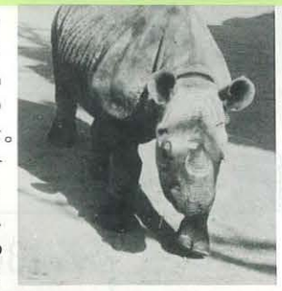
動物園ニュース

☆出産動物

3月23日、バーバリーシープが2頭誕生しました。母親は過去何度も出産しているベテラン

った。共にまだ2才位の子供で、オスはダイスケ、メスはカンナと名付けられ、ゴリラ舎の寝室で公開しています。

4月6日にはクロサイのオスが1頭入りました。昭和49年にオスが死亡し、母親と娘のメス2頭になってしま



ったため、あちこちでおむこさんを探していたもので、待ち望まれていたオスです。このオスは3才位のまだ子供で、Ⅱ世誕生にはまだ5年位かかりそうです。

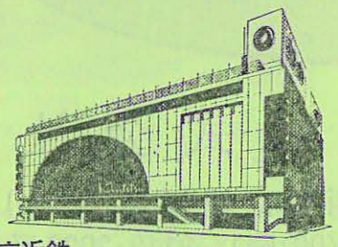
4月15日にはバングラディシュ共和国のダッカ動物園からジャングルキャット1つがいが贈られて来ました。これは今年の1月

夢が広がるショッピング……
近鉄がお届けします

上本町近鉄 TEL.(06)779-1231

アベノ近鉄 TEL.(06)624-1111

奈良近鉄 TEL.(0742)33-1111



東京近鉄

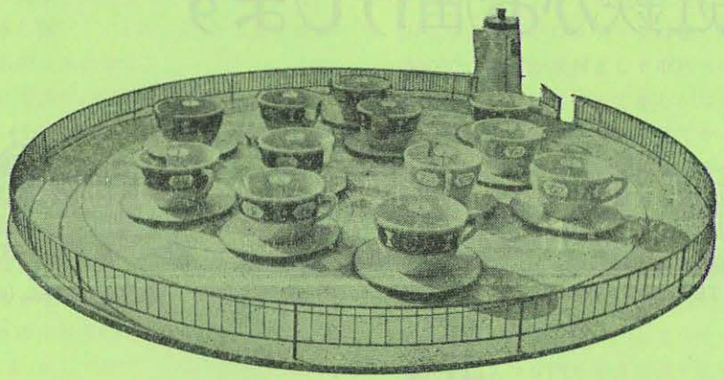
近鉄

☆春の動物園祭り開幕

4月24日から春の動物園祭りが開かれます。期間は5月8日までの日曜、祝日で、期間中、動物の無料相談コーナー、幼稚園児の遊戯、紙しばい、人形劇などの催物を行いました。又、この期間中、動物園クリーンキャンペーンと銘うって動物園の美化運動を展開しました。

でありました。特にたんぼに農薬をまくことをやめてからはイナゴが目立って多くなって来ました。2番目に多いのが蝶や蛾の仲間で、358例と昆虫全体の27%にあたります。然しその多くは幼虫でありまして、特にヒトリガの幼虫がとげに刺されたり、枯草のまたの間にはさみ込まれているのをよく見かけます。カメムシの仲間は皆様も御承知の通り、一寸手

遊園施設委託経営・製作・販売



久竹娯楽株式会社

本社工場　大阪市西区南堀江通3—40

電話 大阪(06)541—3112・3938番

ということが出来ます。

またモズは小形のタカに似ているといわれるほどくちばしが鋭いのですが、脚の力はそれほど強くありません。そのために捕えたえさを脚で押えつけることがむずかしいので、一たん木の枝に刺してから、少しずつ引きちぎって食べるのだともいわれています。大形のえさ、例えばネズミ、小鳥、ヘビ、カエルなどを捕えた時には、このようにして食べるのは

の動機をその中の一つにしぼって意義付けすることは出来ないと思います。この習性をモズの本能といってしまえば簡単なのですが、祖先から受けついだこの習性はその祖先が、古い有史時代の寒冷期に、えさの不足に備えて、繰りかえして来た習性がうけつがれて来たものと考えられるかと思います。そして一たん本能として固定してしまえば、えさの大小にかかわらず、この行動がとられるものではないでしょうか。

（日本鳥学会評議員）

動物園ニュース

☆出産動物

3月23日、バーバリーシープが2頭誕生しました。母親は過去何度も出産しているベテランだけに、じょうずに育てています。

3月30日にはフタコブラクダ（メス）が生まれました。母親はこれが2度目の出産で、仔も順調に育っています。

4月9日にはイエローアナコンダが出産しました。日本では初めての繁殖と思われます。このヘビは卵胎性のヘビで、卵ではなく仔ヘビを出産します。7頭出産した内、4頭は惜しくも死亡しましたが、残る3頭は小型の水槽に入れて飼育しています。

翌4月10日にはインドニシキヘビが3年ぶりに産卵しました。

卵の数は20～30個位で、とぐろをまいて卵をあたためています。うまくいけば6月中頃にかわいい仔ヘビが誕生することでしょう。

4月にはフンボルトペンギンが2羽ふ化しましました。ふ化日数は42日でした。2ケ月ほどは巣から出て来ないため、まだ当分お目見得できないでしょう。

☆新着動物

3月8日、2頭のチンパンジーが入りました。共にまだ2才位の子供で、オスはダイスケ、メスはカンナと名付けられ、ゴリラ舎の寝室で公開しています。

4月6日にはクロサイのオスが1頭入りました。昭和49年にオスが死亡し、母親と娘のメス2頭になってしまったため、あちこちでおむこさんを探していたもので、待ち望まれていたオスです。このオスは3才位のまだ子供で、II世誕生にはまだ5年位かかりそうです。

4月15日にはバングラディシュ共和国のダッカ動物園からジャングルキャット1つがいが贈られて来ました。これは今年の1月に当園から贈ったアナグマ、タヌキ各1つがいとの交換動物で、日本では珍しいヤマネコの一種です。

☆大森山動物園へニホンシカのプレゼント

3月30日、秋田市立大森山動物園へニホンシカ3頭を寄贈しました。大森山動物園ではオスのシカしかいないため、当園のメス3頭をプレゼントしたもので、来年にはII世誕生の吉報が届くことでしょう。

☆エミューの卵のプレゼント

当園のエミューは2羽共オスのため困っていたところ、京都市動物園から4個、みさき自然動物園から3個のエミューの卵のプレゼントがありました。卵は濃い緑色で、500gもある大きな卵です。早速ふ化器に入れてあたためていますが、うまくいけば5月初め頃にはかわいいヒナが誕生することでしょう。

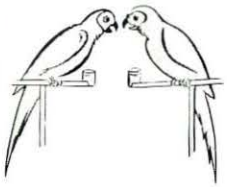
☆ゴリラ舎改築工事完成

昨年暮から改築工事を進めていたゴリラ舎は、3月末完成しました。今までより観覧通路がかさ上げされ、運動場には新たに砂場、プールなどを設けました。

☆春の動物園祭り開幕

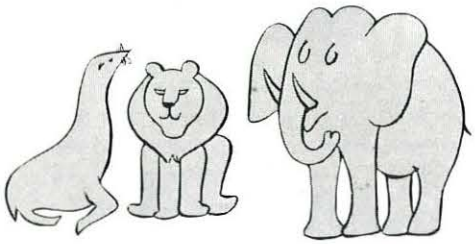
4月24日から春の動物園祭りが開かれます。期間は5月8日までの日曜、祝日で、期間中、動物の無料相談コーナー、幼稚園児の遊戯、紙しばい、人形劇などの催物を行いました。又、この期間中、動物園クリーンキャンペーンと銘うって動物園の美化運動を展開しました。

なきごえ　昭和52年5月15日発行（毎月1回15日発行）　第13巻第5号（通巻141号）
編　集／大阪市天王寺動物園
発行人／大阪市天王寺動物園協会　和田辰巳
印刷所／株式会社　松村善進堂　定価100円（送料共）
〒543 大阪市天王寺区玉水町2
電話　大阪（06）771－0201
振替口座　大阪　37823
1年継続（12部）1,100円（送料共）



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達



・医学実験用動物
・愛玩犬、猫直輸入
・宣伝用、テレビ用、貸動物
・教材用鳥獣剥製販売
・原色世界雑類図鑑（34種1枚もの）要郵便券150円・鳥獣価格表100円

有限会社　**吉　川　商　会**

本　社　神戸市生田区中山手通三丁目二八番地　電話（078）221-8195・221-1517
飼育場　神戸市葺合区神仙寺通三丁目一番地　電話（078）241-3494

自然の
おいしさ

全糖

●合成甘味料・合成保存料・合成糊料・合成着色料はいっさい含まれていません。

雪印ヨグール

パイン・オレンジ・ストロベリー・フルーツカクテル

各130c.c.＝90円

編集委員　〈小谷　潔・林　邦彦・大野　尊信・米田　敏光・樽本　勲・中川　道朗・高橋　真三
深井　和美・野口　秀高・宮下　実・橋本　一郎・長瀬健二郎・農本　武志〉